



ジュニア・コンクール レポートより

ショパンコンクールに至るまで、現在では様々なジュニア・コンクールの経験が重要視されている。そこでの体験がいかに有益なものであったかを語るお手紙が、たくさん寄せられている。その一部をご紹介します。

Jr.ジーナ・バックアウワー国際コンクール

生徒が参加したJr.ジーナ・バックアウワー国際コンクールを見学し、世界のレベルを再認識……金子 勝子 (当協会監事)

昨夏、栄えあるトヨタ指導者特別賞を受賞された金子先生。今年初めて国際コンクールに生徒を参加させ、ご自身も同行されました。今回参加したのは、ハイレベルで知られるJr.ジーナ・バックアウワー国際コンクール(米)。11~13才が対象でしたが、量としてはリサイタルが出来るほどのグレードの高い曲、及びコンチェルト1楽章1曲が必要でした。しかも7ヶ月という短期間で。「本人は良く頑張ったのですが、3日間連続して毎日1次2次3次と過ぎていく中でこなされてない曲があるた

め、2次までは新聞批評覧にて名指しでお褒め頂いたりしても、3次まで持ちこたえられず、とうとう腱鞘炎にはなるは、仕上げが不十分な部分が露呈するは、でした。」第1位の中国人がショパンエチュードOp.10-1を難なく弾いていたことに驚いたという金子先生ですが、国際コンクールの水準を改めて認識した今回の挑戦、先生にとっても収穫は大きかったようです。

(2000年度コンペプログラムより抜粋)

自己アピール力と語学はこれからの鍵……渡辺 泉 (当協会正会員)

今回私が生徒と共に、このコンクールに参加させていただいて感じた事は、「日本人は、演奏は他の国に劣らない位のレベルなのに、社交面に至っては、あまり身につけていない学習が必要があるな」という事でした。演奏は堂々としており立派で、衣装も毎回バッチリ決まり、それぞれの持っている力を十分に発揮していました。ところが、舞台上での立ち振る舞い、笑顔に至っては、同じ11才~13才かしらと思うほど外国人の方が表情が自然で、観客へのアピールもうまく、大人だなと感じました。それを見て、私は自分の生徒も含め、「こういう事も、これからは指導していかなくてはいけない時代になってきたんだ。」と思いました。語学もです。語学力がつけば、もっと楽しくなり外国に行っても日本にいるのと同じ感覚で人と接する事ができるでしょう。これは英語が苦手で、うまく話せない私自身への忠告でもありました。

■「演」じて「奏」することを学ぶ

小さいうちから、海外で勉強する機会に恵まれるのはとても幸せな事です。演奏という字は、「演」じて「奏」と書きます。奏する技術だけでなく、演ずる事の大切さも色々な角度からは是非身につけて欲しいと私は思いました。

大変レベルが高かったプレ・オーディションで選ばれ、日本代表として参加できた5人は、それぞれの思いと感動を胸に帰国したことでしょ。

そのチャンスをつくって下さった福田先生、ポール・ボライ先生をはじめPTNAの先生方、本当に有り難うございました。貴重な経験を生かし、これからも私自身生徒と共に勉強を続けて行きたいと思ひます。

(2000年度コンペ特集号より抜粋)

青少年ホロヴィッツ記念国際コンクールをふりかえって

International Competition for Young Pianists in Memory of Vladimir Horowitz

杉谷 昭子 (当協会正会員・国際委員)

この国際コンクールは、ウクライナ独立を機に同国の生んだ二十世紀最高のピアニスト、ウラジミール・ホロヴィッツを記念して創られた。世界との文化・音楽交流とその発展、若い音楽家の発掘と育成を主旨として、ホロヴィッツが学んだGlier Music Schoolとキエフ市の文化局が協力し、1995年にキエフ市で第1回が開催された。今回が第4回になり、既に24カ国から165名の若いピアニストが参加している。日本人も第2回より参加しており、年中部門(18歳以下)で、現在2枚目のCDを発売し将来を囁望されている若手ピアニストの松本和将が第3位に入賞している。今回も青少年ホロヴィッツ記念国際コンクール実行委員会より要請を受け、ソプラ(ロシア芸術振興協会)の渡部中子が団長として6人の子供を引率して参加した。

2000年11月1日から4日まで行われたホロヴィッツ・デビュー部門(14歳以下)に、前出の6人の生徒が参加した。デビュー部門は演奏時間によって3つのグループに分かれており、グループA(演奏時間10分)に5人、グループB(15分)に1人参加した。全部で67名が演奏し、日本人の結果は1人が3位入賞、2人が6位入賞(うち1人は作曲賞も受賞)という成績であった。デビュー部門には7つの国からの参加があり、日本はウクライナに次ぐ多くの参加者を出した。日本との違いを痛切に感じたのは、たとえいくらかの傷がついていてもいいものが選ばれたということと、どんなにテクニク的に弱い子供であっても音楽が伝わって来た、ということであった。日本からの6人も良い演奏をし、観客からも熱い拍手をもらった。審査員にも高い評価をいただいた。

しかし、鳥肌がたつほど感動し、もっと聴いていたいと思わせたのは、やはりウクライナの子供の演奏であった。キエフ市内にある23の音楽学校のうちのひとつ、音楽学校 #3 (No.3)の練習室を借りて練習させてもらったが、楽器もかなり古く、グランドピアノのある部屋も限られており、椅子もパイプ椅子や普通の椅子であった。コンクール会場においてさえも高低自在の椅子はなく、厚さも大きさも違う敷物を自分で組み合わせお尻の下に置いて演奏する、という状況であった。日本の子供たちと比べると、雲泥の差ほどの厳しい環境にありながら、なぜあのように指先から生き々とした豊かな音が出てくるのか、と大きなショックを受けた。控え室で垣間見た本番直前の子供とその母親、そして先生

の姿も印象的であった。子供は鍵盤を見るのではなく、目の前に立つ先生の表情を見ながらそれに合わせてピアノを弾いていた。母親と先生が同じようにメロディーを歌い、拍子を取り、どこか不自然な流れがあった時には同じように二人が何か叫んでいた。コンクールの間中ずっと感じていた自然な音楽の息づかい、間(ま)がそこには存在し、先生は技術的なことを一言も言わなかったかわりに、さかんに耳で自分の音を聴くようにと言いつけていた。また、どこの国も親の一生懸命さは同じだと思いつつも、何か関わり方が日本とは違うように感じた。

コンクール終了後結果発表までの間、控え室でウクライナと日本の参加者が、言葉も通じないのにピアノを通して遊んでいたのは、とても微笑ましい光景であった。しかしウクライナの子供たちが、コンクールで弾いていない曲を次々に披露したのは驚かされ、そのレパートリーの広さに日本の子供たちはすっかり圧倒されていた。娯楽の少ないこの国で、音楽は生活の一部となり、自然に溶け込んでいるのを感じた。また、朝10時から夕方7時過ぎまで行われるコンクールのどの時間帯も、会場は熱心な聴衆であふれており、演奏に対しての感動を拍手で表現していたのも日本との大きな違いであろう。カーテンコールやブラボーの音が、参加者の力を引き出したことも事実である。

11月4日夜には、キエフで最も由緒あるフィルハーモニーホールにおいて、授賞式および受賞者記念演奏会が行われた。授賞式では6位までの入賞者に加えて、日本からの参加者や他国からの参加者もステージに上がり特別賞をいただいた。引き続き行われた入賞者記念演奏会では8人が演奏し、3位の重野文歌と、作曲賞の田中俊が出演した。どの演奏者へも、聴衆の惜しめない拍手が送られ、何度もカーテンコールがおこった。特に田中俊の自作の曲を聴衆は喜び、ブラボーの音が飛び交った。このような観客の熱烈な反応は日本では体験することがないだけに、演奏者のみならず日本からの参加者にとっても貴重な思い出となったに違いない。こうして感動のうちにコンクールを終え、言葉の壁を越えて、参加者同士が抱き合っていたつまでも別れを惜しんでいた。今回のコンクールへの参加で子供たちは音楽を別の角度から学び、日本では気付かなかったものを感じとったことが何よりの成果であり、子供たちの今後に必ず生きてくるものと信じている。

特集1

1810-1849



Polska



1810-1849



Polska

特集1

